

クラレンス・「ケリー」・ジョンソンは、大型で大胆な設計の「ブラックバード」SR・71偵察機やYF・12戦闘機の設計者です。これらの機体は専門家達がそれは不可能だと言っていた頃にも、極秘のうちに音速の三倍の速度の飛行を行っていました。また、彼は優雅でグライダーのようなU・2偵察機も設計しましたが、この機体は「二万四〇〇メートル以上」とされる高度に達するを事が出来ました。

ジョンソンはまた米国最初の実用ジェット戦闘機であるF・80シューティングスターも設計しました。第二次世界大戦における、双胴型の独特の形状をしたP・38迎撃戦闘機は、主翼の前縁を流れる気流が音速を越えるために生じる「圧縮性」の影響に遭遇した最初の機体でした。彼は四〇機種以上の機体の設計に関与し、その半分以上は彼のオリジナルな設計でした。

彼は各種の航空機設計に関する賞を数多く受賞していますが、中には二度も三度も受賞した賞もあります。それらの賞には、アメリカ国家科学賞、国家安全保障褒章、そして合衆国大統領が民間人に



1983年、国家安全保障褒章をロナルド・レーガン大統領から授与される。
中央は夫人のナンシー・ジョンソン。

授賞する最高の賞である大統領自由勲章が含まれています。

ジョンソンの秘密工場、「スカンクワークス」の正式な名前は「先進技術開発プロジェクト」ですが、革新的な設計の機体を、最小限の期間で、秘密を保って開発した実績で世界的に有名です。「速やかに、肅々と、期限内に」がスカンクワークスのモットーです。

ソ連が一九六〇年に赤の広場で、パワーズ飛行士が乗ったU・2偵察機の撃墜された残骸を一般に公開した時の報道各社がその写真を見せた時のジョンソンの対応は、いつも通りのきっぱりとして分かりやすいものでした。ジョンソンは「違う違う、これはU・2ではない。」とはっきりと断言しました。

ソ連は国土の上空を高々度で偵察飛行するU・2偵察機に何年も手が出せませんでしたでしたが、その時は撃墜に成功しました。しかし、ジョンソンはその残骸の展示がソ連の演出であることを見抜いて、それがU・2機の残骸である事を否定しました。設計開発作業だけでなく、機体の製造状況も工場で見えていたので、ソ連が展示した残骸がU・2偵察機のものではない事が一目でわかったのです。この尊敬を集めている設計者に対しては、その個性ゆえに尊敬する人もいれば、好きでない人もいる事は事実です。

四四年間働く事になる会社に新入社員として入社したその日に、上司に向って、民間旅客輸送の分野へ参入するために会社が新規開発している全金属製の機体は空力的に不安定だと言いつちました！この種の不安定性は一九三〇年代の航空機では一般的に許容されていました。しかし、この若い技術者は、彼が在学していたミシガン大学がその機体の風洞試験を委託された時に、試験の実施を担当していたのです。風洞試験の指導をしていた教授は、試験で判明した不安定性は許容できるとの意見でしたが、ジョンソンはがんとして同意しませんでした。会社の上司、先輩もその不安定性は許容できると考えていました。しかしジョンソンは同意しませんでした。もちろん彼が正しかったのです。彼の意見で再設計した機体は、一九三〇年代から一九四〇年代に世界的にロッキード社を有名にした、ロッキード製双垂直尾翼の輸送機の長い歴史の始まりとなった機体でした。彼のこうして個人的な言動のため、ロッキード社の技術部内で、彼はすぐに「頑固者」のあだ名で呼ばれる事になりました。

ケリー・ジョンソンはいつも自分の原理原則に従って行動しました。

一九五〇年代の初頭に、米海軍が垂直離着陸可能な機体の開発を計画し、ロッキード社はその機体の開発を受注しましたが、当時のエンジンの出力の大きさを考えると、この種の機体は安全ではないとして、彼は米海軍に開発は中止すべきだと率直に進言した事が有ります。

彼は一九五〇年代の後半に、水素燃料を用いる機体の開発を断った事もあります。この技術は、当時としてはあまりにも進んだ技術でした。契約で初期検討を行った所、スカンクワークスの彼の後継者の表現を借りれば、「太っちょの機体」になることが分かったので、ジョンソンは開発を断りました。彼はU・2偵察機の開発では、契約金額は二〇〇〇万ドルでしたが、余ったからと二〇〇万ドルを政府に返した事が有ります。しかも、契約では二〇機を製作する事になっていましたが、契約金額の枠内で更に六機を製作してしまつたのです。

「僕は一二歳の時から、自分が何をしたいのか分かつていたよ。」とジョンソンは言っています。

現在ではジョンソンは正規の業務からは引退しましたが、ロッキード社の顧問はしていて、スカンクワークス内に部屋を持っています。彼はまだ忙しく働いていますが、仕事を始める時間は、現役の時のように午前六時ではありません。午前六時に出社していたのは、三時間の時差がある東海岸にある顧客の事務所と連絡を取るには良い時間だったからです。

この本は航空の歴史や特定の機体の開発の経緯を対象とした本ではありません。この本は彼が働いた時代にあつて、偉大な航空機設計者だったケリー・ジョンソン自身が、自らの人生を語つた内容を

第1章 貧しくとも志は高く

真冬のミシガン州北部は、その地で新しく生活を始めようとする若い移住者にとっては、寒くて厳しい環境の土地だった。私の父は意図的にこの土地を選んだのではなかった。

一八八二年、二四歳だった私の父であるピーター・ジョンソンは、生まれ育ったスウェーデンの小さな町マルモに婚約者のクリスチヌ・アンデルソンを残して、より良い生活を求めてアメリカ合衆国へ旅立った。スウェーデンは国民皆兵制度を採っていた。父は間もなく陸軍に徴兵される予定だったが、軍隊には行かないと決めたのだ。

彼は働いて貯めた六〇〇ドルで、ネブラスカ州で土地を購入する事にした。中西部の豊かな土地に将来を賭けるつもりだった。

シカゴまで行った時に、「新世界」で待っていたのは明るい未来ばかりではない事を思い知らされた。シカゴで知り合った連中が悪い人間だった。文字通り船から降りたばかりの、世間知らずの外国人を食い物にしようとする連中が何人かいた。ピーター・ジョンソンはネブラスカの農場を購入する